

アトス山修道院の生活とヨアンネス・クリマックスの「アパスイア (ἀπάθεια)」

日大生産工 ○中西裕一

1

正教会の奉神礼祈祷書である『三歌斎経』⁽¹⁾によれば、大斎期間の第四主日には「階梯者聖イオアン（ヨアンネス・クリマックス）」の奉神礼が行われる。ヨアンネス・クリマックスは、その著『樂園の梯子』⁽²⁾において、霊的生活の階梯を三十編の講話にまとめて解き明かす。修道院共和国聖山アトスに住む修道士たちとの会話においても、みずからの修道生活をこの天国への階梯に喩える場面に幾度か出会った⁽³⁾。修道院はもとより、町の聖堂の壁には『樂園の梯子』を題材としたイコンにまみえることも多く、とりわけ正教徒にとっては馴染み深い聖人でもあり、その教えについても、広く正教の信仰生活、特に修道生活の指針となっていることは、修道士たちの言葉からうかがい知ることができる。ところで、ここで修道院の霊的指導体制についておおまかに触れておこう。以下は、メグスティス・ラヴラ修道院を例にとったものである。

キリスト教の修道制は聖パコミウスの修道規則にその淵源をたどることができる。ここでは修道士たちは聖職者となることはなく平信徒であった。アトスでは、今でもこうした「イエロンダ」と呼ばれる平信徒の長老修道士の指導性が、修道士たちの霊的生活向上に寄与している。実際には聖大バシレイオスの修道規則以降は、修道院にも聖職者が置かれるようになり（主教、修道司祭、修道輔祭など）、奉神礼を執行することが修道院内でも可能となった。しかし、アトス山では現在でも司祭であるなしに関わらず、イエロンダは霊的指導者であり、イエロンダが司祭の場合は告解機密を通じて、非司祭の場合は日々の生活において修道士たちを指導しつつ祈りの日々を送る。一般信徒の巡礼者の多くも、そのような師父を訪ねて霊的示唆を求めてやってくる。近年でもアギア・アンナのパパイオアンニスをはじめ、幾人かの師父と言われる平信徒修道士が存在する。

ケリ（修道小屋）などでは、一人のイエロンダ（司祭、非司祭にかかわらない）のもとに数人の修道士が、自給自足体制で共同生活を営んでいる例が多い。共住修道院からの経済的援助はまったくないケリは、経済的基盤を確立する必要があり、所属する修道士たちは様々な労働（イコン画き、乳香生産など）に従事している。司祭不在のケリでは、奉神礼に参拝するためには、復活祭や諸祭日など、特別の日に司祭が巡回してくるのを待つが、定期的に修道院に通ってきて領聖（聖体拝領）する。アトスの先端部に点在するラヴラ所属のあるケリに住む修道士たちは、深い雪をかき分けて徒歩で領聖のためにやってくる（最も遠くて約二十キロメートル程ある）。古びたリュックを背負って、靴は湿って泥だらけ、長い道のりをやっとたどりついた、ほとんど乞食同然の姿になっているのだが、奉神礼の行われる聖堂にはいる頃は皺ひとつないラーソ（黒衣）をまとっている。聖体礼儀が終わってトラペザで黙々と食事をして、またもとの乞食のような姿に戻って別れを告げて帰って行く。

司祭不在のケリにおける平時の祈祷は、すべて司祭の唱えるべき部分をとばして祈祷文を読み、歌う。九時課、晩課を祈り、夕食をとって晩堂課を祈り、自室で祈って就寝し、早朝から夜半課、早課、時課、ティピカ（聖体礼儀代式・聖変化のない奉神礼）を終えると朝食をとる。イエロンダと修道士たちは、時課祈祷が終わると若干の休みをとったのちに労働にこししみ、そうした生活の現場で弟子たちは様々な生活体験のなかでも、イエロンダから霊的指導をうけていく。修道院における霊的生活の指導者たちを、修道生活を競争競技に例えることがあるが、その指導の方法はきわめて具体的、実際的なものである。

修道院における聖職者については、以下のような区別が認められる。

(1) 修道院長（主教あるいは掌院・霊的指導者として筆

頭の聖職者。主聖堂の管理者であり、主聖堂で告解機密を執行する。修道院長が主教でないこともある。側近の修道士（非司祭）数名が直属する。）

(2) 修道司祭（長老司祭の場合は霊的指導者。主聖堂以外の小聖堂の管理者。告解はその司祭の管理する小聖堂へそれぞれ赴いておこなう。）

(3) 修道輔祭（将来の司祭候補であり、司祭の管理する小聖堂の管理を補助する。）

修道院長はまさに修道院における筆頭の霊的指導者であり、すべての修道士のための告解機密の執行者でもある。修道士たちは、晩堂課（食後の祈り）のあとおこなわれる聖堂における告解と罪の赦しのための伏拝を終えて、修道院長の祝福をいただいてから、自室へ戻って自分の祈りの時を過ごしたのち、明朝の早課に備えて安らかな眠りを神に願って床に就く。ある日、聖堂で修道院長から祝福をいただき、自室で祈り終えて眠ろうとするが、隣室からは夜半過ぎまで祈祷文の誦読や祈りの声が漏れ聞こえてくる。短いまどろみの後に、はや朝の祈りのシマンドロを聞くことも幾度があった。

私の滞在した「斎（節食）」の期間は、とりわけ祈りに集中できる時であった。世俗の日常生活でありがちな飽食の気怠さは、はるか彼方の出来事として遠のき、かえって心はしだいに研ぎ澄まされ、むしろ深い祈りによってもたらされる大きな恵みに満たされていく。しかし、一日に「おかゆ」一杯だけの日々は、やはり大きな試練であることには違いがない。奉神礼の次第を示した『ティピコン（奉事規則）』の「斎」の項に、最も厳しい段階の食事方法として「クシロファギア（乾燥した食品のこと乾燥パン、ナッツ類）のみ食べる事を許す」とある。これは、毎週、水、金の朝のお茶に時間にトラペザ（食堂）で提供される。修道院では大斎（復活祭前四十日間の斎期間）第一週間の月曜日、火曜日はトラペザが開かない完全絶食日となる。絶食二日目になる火曜日の夕方には空腹も耐え難くなってくるが、その頃トラペザの裏口が開いて、まさにそのクシロファギアが配給される。

そのような大斎の食生活に辟易して、それが恐らく私

の表情やふるまいに現れていたにちがいない。あるイエロンダからお茶をご馳走すると告げられた。呼ばれて部屋をたずねてみると、まずヤカンでお湯をいっぱい沸かし、そのなかに紅茶のティーバックをひとつ、貴重品だと言っていれて、これでもかと煮出していく。数分後、ようやく沸騰を止めて、さて少し深めの皿をふたつ揃えて、そこに固いソパン（クシロファギア）を平たく敷きつけて、蜂蜜を万遍なくまぶしてから、即席ラーメンをお湯で浸すように、紅茶をジュッと注ぎ、何度か裏返し裏返しを繰り返して、突然私にフォークを渡して、少し冷めてから食べるとすすめた。頃合いの温度になってから、いわばクラゲをフォークで刺して持ち上げたようなベロンとした物体にかぶりついた。口の中で広がる甘みと、色だけは鮮やかなのだが、おそらく壊滅的だと思われた紅茶の香りも微かに感じられようでもあり、腹におさまったときの温もりは、冬の朝に温めた牛乳を飲んで腹に染み渡るような錯覚を覚えていた。そして、イエロンダは斎の過ごし方についての「体験」をゆっくり語り始める。こうしたひとときのおかげで絶食二日目の夜にあって、空腹感からくる不安定さは大分遠のいて、水曜日の先備聖体礼儀後の絶食開始三日後の最初のトラペザまで空腹に堪える兆しがみえた。そしてこの体験とイエロンダとの「十字架への叩拝」をめぐる歓談のひとつときは、修道院における生活の転機となった。

大斎期間のある朝、宿坊の廊下で会ったイエロンダは「ねえ、パーテル・パヴロス、気分はどうだい、サラコスティ（大斎）だね、とても清らかな気持ちだねえ」と静かな笑顔で、私にことばをかけてくれた。この一言は、その後のサラコスティの期間全体に光彩を放ったかのように私の緊張を解くきっかけになった。イエロンダたちは、私が挑んだ議論や尋ねた事柄には、ただちに「理屈」では答えようとしなかった。黙って手本を見せ、必要な体験を示唆していくことが多かった。霊的生活に関わる問いに対する答えの殆どは告解と関わる実践的課題として私に示され、私に会得されることをイエロンダはただ待つだけだった。そして、幾日も過ぎて、もう

そのことを私自身が忘れかけている頃に、何気なくその話を持ち出して、私に様々なことを気づかせる言葉をかけてくれた。イエロンダが、ずっと私にまなざしを向けていてくれた事をさとした。そのような生活の中にあって、修道士たちが口にする言葉はのうちで、記憶に鮮明ないくつかの言葉。その筆頭は、やはり「謙遜」において他にはないが、それに続くことばは、私の体験では「アパスィア (ajpavgeia)」だった。ここでは、『楽園の梯子』の最終段階、すなわち霊的な完成に近づく最後の四段に含まれ、第二十九番目の講話でおもに論じられる「アパスィア (不受動心)」⁽⁴⁾に触れながら、アトスにおける修道生活の一端を紹介したい。

2

聖大斎（復活祭前四十日間の節食期間）においては、日々食生活を律するうちに、告解とそれに伴う祈りが次第に深められ、パスハ（復活祭）を迎えるよろこびへとつながっていく。斎（節食）が告解と祈りによってもたらされる自らの成長に結びついていかなければ、単なる禁欲的な苦行に終わり形骸化する危険性を秘めている。すなわち斎は神の賜であり、きたるべきよろこびのための生活全般にわたる準備のいとなみ⁽⁵⁾とならねばならない。パスハの早課において読みあげられる「ヨアンネス・クリュソストモスの説教」も、神の国に至るよろこびを余すところなく説くものである⁽⁶⁾。パスハが、よろこびのみなもとであるのは、まさしく「死」の支配がキリストによって打ち破られ、もはやサタナ（悪魔）は人々を支配する権能を奪われ、かわって私たちがアギアズモス（成聖）を獲得することとなったことによる。すなわち、このよろこびは、私たちが聖神（聖霊）に満たされることによっておのずからわき出てくる感情でもあるから神の賜でもある。そして、このあふれ出る熱切で情熱的な喜びは、奉神礼の祈りのなかで体現されていく。

例えば、パスハの一週間前の主日、「枝の祭り」と呼ばれる「聖枝祭」の早課は、前の晩の夜半にクライマックスを迎える。イエスキリストのエルサレム入城のくだりの福音書の一節を輔祭が読み終えるころ、堂役の修道

士たちが大きな籠に充たした新緑の木の葉を、聖堂の床いっばいに蒔き始める。次第に床いっばいに木の葉が敷き詰められると、堂役たちがそれを踏みつける音が伝わってくる。「カサカサ」という乾いた響きと緑の香りがそれに加わる。そして修道士や巡礼者たちは、その葉の上を歩いて福音書に接吻し、祭服を完装した主教の手から、新緑の小枝を一本ずついただいて、その日はその枝をずっと携えつつ奉神礼に参拝する。床に敷き詰められた新緑の木の葉を踏みすすむと、聖堂に充たされた木の葉の香りが体験される。

この瞬間、イエスキリストのエルサレム入城の場面がこの聖堂において再現され追体験される。そこで展開される光景、香りと音、いわば五感をもって受け容れられるすべてが、奉神礼のコスモスをつくりあげる。聖堂に置かれたアイコンや壁画、そして乳香の香り、光、それらは、奉神礼のイメージをかたちづくる役割を果たす。

さて、こうした日々祈りに専心するアトスの修道士たちを前にして、修道院における生活の「目標」をあらためて尋ねると、「神の国に至ること」、そして「アパスィアに達することだ」という答えが返ってくる⁽⁷⁾。しかしながら、修道士たちの生活は暗い禁欲生活を思わせるものとはほど遠く、よろこびをともなった営みとしてとらえられている。それは、大斎の時をすごす彼らの「安和 (心安らかなこと)」のまなざしのなかに見てとれる。

ところで、大斎期間において修道士たちは奉神礼を通じて、ヨハンネス・クリマコスの思想の一端に触れる機会をもつ。この期間の奉神礼は、通常の時期よりも読み上げ、詠いあげる祈祷文も格段に多く、そのために時間も費やされる。奉神礼は一日三回に増えて、計八時間を超える。実は、その奉神礼の中で、毎日ヨハンネス・クリマコスの著作が延々と読み上げられていくのである。もとより、正教会の奉神礼では、「聖詠 (詩篇)」をはじめ、『旧約聖書』の預言書、そして『新約聖書』（黙示録を除く）全編などが、奉神礼のなかで誦読されるが、その他に師父の言葉も誦読される。大斎第一週間の月曜日から金曜日までの毎日、早課、三時課、九時課に

において『楽園の梯子』は読まれていく。この時は、祈祷椅子に腰をおろすこともできる。司祭が蠟燭を携えて福音書を読むようなゆっくりした速度で読み進み、三十分～一時間に及ぶことも稀ではない。このような師父の書の誦読は、シリアの聖エフ렘などいくつかの師父たちの著作の指定があり、すべて祈祷書『三歌斎経』に細かく指示されている。修道士たちにとってそういった師父たちとの関わりを意識するのは、まさしく奉神礼を通じてなのである。

しかし、奉神礼のみがこうした学びの時ではない。修道院の新しい一日は、夕方の晩課から始まる。十七時頃に合図のシマンドロが鳴って聖堂に集まり、晩課を祈り終えるとトラペザ（食堂）に移り、夕食の時を迎える。また、早朝の聖体礼儀が終了すると、やはりトラペザの扉が開く。修道院長を先頭にして、司祭、輔祭、修道士たち、巡礼者の順で食卓に着くと、鈴の音を合図に食事が始まる。食事は無言で進められて、同時に聖人の言葉が誦読される（奉神礼においては、古典ギリシャ語原典が誦読されるが、トラペザの場合は現代ギリシャ語訳が多く用いられた）。こうして、聖人の言葉を栄養としてうけいれて「肉体の食事」に並行して、「魂の食事」もすすめていくのである。

さて、一般に「アパシア（アパティア）」という語は、ストア的な禁欲主義の文脈で理解されている。いわば心の自律性を欠いた状態、快苦、喜怒などの感情をおさえて、強固な意志と理想に基づいて生き禁欲的態度を示す^⑧。しかし、この「アパシア」という語を、階梯者イオアンも『楽園の梯子』第二十九講話において用いているが、これをストア派的文脈でとらえることはできない。大斎第一週間の金曜日、『楽園の梯子』の誦読が、終わりに近づく頃に以下のくだりが読み上げられる。

「さて、肉を不滅にし、理性を被造物より上に挙げ、すべての感覚を理性に従わせる人は、当然に不受動な人であるし、またそう認識されている。（その人は）主の御前に魂を置く人であり、その人の魂は魂の力を超えて主に向かって常に前進するのである。さて、ある人々は

不受動心を身体の復活の前の魂の復活であると、他の人々は（不受動心を）神の完全な知識、天使に次ぐものとしている。」

ここでは、魂の力を超えて主に向かうことによってアパシアが得られることが述べられ、そしてその境地においては、むしろその人自身が生きているのではなく、その人のうちにキリストが生きていることをヨアンネス・クリマクスは強調する。

① 『トリオディ三歌斎経』日本正教会、明治44年7月、pp.672 sqq

② J.-P.Migne(ed.), *Patrologia Graeca*, t.88, Paris 1864, pp.643-1153.

John Climacus, *The Ladder of Divine Ascent*, transl. By Colm Luibheid & oth., New York, 1982.

この書のギリシア語の題名は『我らの聖師父イオアンの階梯』である。

③ 筆者のこれまでのアトス滞在の経験においても、修道士たちの話題として頻繁に取り上げられる人物であり、著作である。

④ この語は、もとは古代ギリシアのストア派において用いられた概念であるが、師父たちの用いる意味とは異なっている。ストア派の禁欲主義的理解については、cf. Diogenis Laertii *Vitae Philosophorum*, 7-1-117 etc.

最後の四段の内容は、第二十七講話「静寂」、第二十八講話「祈り」、第二十九講話「不受動心」、第三十講話「信・望・愛」である。

⑤ 斎の本旨については「我等主に悦ばれ受けらるる斎を守らん、真の斎は乃ち悪事を離れ、舌を慎み、怒りを積み、諸欲を断ち、毀謗（そしり）、詐譌（いつわり）、誓に背くことを除く、此れ真の斎にして受けらるべき者なり。」（『大斎第一週間奉事式略』日本正教会、p.134、月曜日晚課、挿句のスティヒラ）

⑥ 「斎せし者、及び斎せざりし者は今日樂しめ。筵は丰盛（ゆたか）なり、皆食いて飽くべし。犢は肥大なり、一も飢えて出ずべからず。皆信の筵を樂しめ、皆慈愛の富を享けよ。何人も貧窮を憂うべからず、蓋公共の国は現れたり。」『五旬経略』日本正教会 pp. 22 sqq.

⑦ 2003/12/22 放送「秘められた聖地アトス」（NHK BS ハイビジョン放送）の番組の中でも修道士は、みずからの理想を「不受動心（ἀπάθεια）に達すること」と答えていることは極めて興味深い。

⑧ ストア派については、ロング（金山弥平訳）『ヘレニズム哲学』京都大学学術出版会、2003。などを参照。